

生業に着目した集落の環境認識に関する研究

安田 尚央¹・二井 昭佳²

¹ 非会員 いであ株式会社 建設統括本部 水圏事業部 水工部
(〒154-8585 東京都世田谷区駒沢 3-15-1, E-mail:ysd21307@ideacon.co.jp)

² 正会員 工博 国土館大学理工学部 准教授
(〒154-8514 東京都世田谷区世田谷 4-28-1, E-mail:nii@kokushikan.ac.jp)

本稿では、地形と生業が集落の空間構成や意味付けに与える影響を明らかにすることを目指し、類似した地形環境にありながら生業の異なる2つの集落として伊豆半島の西子浦・東子浦集落を対象に、両集落における立地地形や社寺配置、また道路配置や組割りといった集落の空間構成と、冠婚葬祭などの集落の行事や集落周辺に対する地名認識といった空間利用や意味付けについて調査し、比較考察をおこなった。

その結果、居住空間域と名付けた、周辺環境のなかで集落を定位づけるような空間域の設定には、その地形環境が大きな役割を果たしていること、しかしそのなかで展開される空間構成や意味付けには、その生業が大きく関係していることを示した。また、居住空間域の外側には、生業に応じて設定される空間域が存在する可能性を指摘した。

キーワード：集落の空間構成、環境認識、農村景観、漁村景観、場所の意味づけ

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

集落の形態には様々な種類があるが、いずれもその土地の風土や生業に応じた地域固有の景観を形成してきた。このうち特に漁業や農業といった生業は、その性質上、集落の立地する地域の地形や気候に大きく依存することから、集落周辺の環境の読み取りや意味づけに大きく影響を与えていることが容易に想像される。そして、それが結果的に集落の空間構成やさまざまな行事として表出し、その地域の特色を表しているのだと考えられる。しかし近年では、均質的な整備が進んだことで、集落の履歴を読み取ることが困難になりつつあり、加えて都市部への人口流出により過疎化が進行していることから、そうした集落では歴史を後世へと残すこともままならないのが現状である。このような状況で集落調査をおこなうことは、失われつつある地域特性や意味づけの再認識につながり、人々が環境との関わり方を見直す契機として大きな意味を持つと考えられる。

これまで集落の形態や営みに関する研究は多くあり、特に集落の空間構成に着目した研究や集落内の行事や意味づけに着目した研究がおこなわれてきた。なかでも、漁村景観・農村景観と大別し、集落内の施設配置や道路構成といった集落の空間構成の把握¹⁾に関して、建築分

野の果たしてきた功績は大きい。また、民俗学や地理学の分野では比較的広域の周辺環境まで視野に入れ、意味づけや集落内の行事などに着目した生活史の研究²⁾が進められてきた。これらの研究はいずれも丹念なフィールド調査に基づくものであり、貴重な史料であると同時に、今後のまちづくりに資するところが大きい。しかし本来、集落の空間構成とさまざまな行事は互いに補完しあいながら、その空間構成における環境認識を表すものであろうことを考えると、両者を一体的に取り扱うことが重要だと思われる。

この点において特筆すべき研究として、神代による「日本のコミュニティ」³⁾がある。神代は常日頃見えにくい構造や組織といったものが、常に形として見える家並や道、耕地や山河とどのように対応しているかに着目し、調査、研究を進めてきた。これによれば、漁村や宿場町では紐状の集落形態をとり、散村型の集落でも、その中を一本の主要な道が互いに連絡づけるように配置されている。これが日常く「ケ」の社会、経済軸として機能している。一方で、山や神社へ信仰軸に向けた道では、儀礼や祭く「ハレ」の場として機能する。このように集落の骨格を形成する道に対し、利用や意味づけがどのような関係性を有しているかを明らかにしている。

本研究はこの神代の研究に学びつつも、その対象地の選び方に大きな特徴がある。すなわち、同じ場所にある

集落でありながら、漁業と農業という異なる生業形態をとる2つの集落を調査対象とした点である。これによって、これまでの研究では難しかった、集落の環境認識における生業と地形状況の関係性についてアプローチすることができるからである。

以上のことから本研究では、同一の環境下で生業の異なる集落を対象とし、集落の空間構成に対する空間利用と意味づけを明らかにし、その共通点や相違点から、対象地域における生業と環境認識に関して考察することを目的とする。

(2) 研究の対象と方法

研究の対象地は現在まで集落規模の変化が少なく、同じような地形状況にありながら、生業の異なる2つの集落（西子浦、東子浦）から構成されている静岡県賀茂郡南伊豆町子浦とした。子浦は妻良湾の北に位置し、南の妻良と湾を共有している。その成立には諸説あるが、江戸時代には西子浦と東子浦に名主が置かれ、西子浦は漁業、東子浦は農業を中心とした生活を営んできたとされる。これを裏付けるものとして、例えば天保6（1835）年の妻良と共同で鮪や鰯漁をした際の割振勘定⁴⁾によれば、その収入の1%を東子浦へ祝義金として贈り、残りを西子浦、妻良で分配したことが記されており、古くから西子浦が漁をおこなっていたのに対し、東子浦はこのような漁への参加をしていないことがわかっている。一方、東子浦に住む大部分は畑を所有しており、田は多い家で七反程度であり、半数は小作として農業に従事していたことがわかっている⁵⁾。

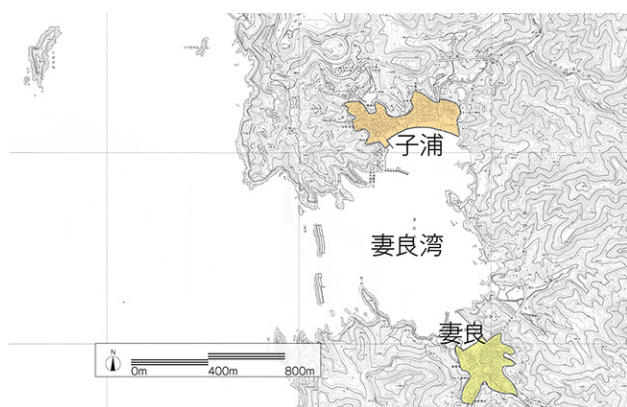


図-1 妻良湾概要図

研究の方法は、まず2章では集落の立地地形や道路の構成、組割り、社寺の位置に着目し、両集落の空間構成の共通点と相違点を把握した。3章では集落の名づけや冠婚葬祭、子どもの頃の遊び場、地名認識に着目し、2章で得られた空間構成と空間利用の関係性や地名認識からみた環境把握について、両集落の共通点と相違点を整理した。4章では、2,3章の結果を踏まえた両集落の特徴をま

とめ、環境認識や空間構成と生業の関係について考察した。なお調査方法は、子浦に関する文献が少ないこともあり、住民へのヒアリングを中心に、部分的にアンケートを用いることとした。

2. 両集落の空間構成

(1) 調査の視点

調査項目の選定として、まず地形図から読み取れる項目として、改変以前の集落規模やその立地する地形について着目した。また神社や寺院など、集落内の行事がおこなわれ、よりどころとなる施設に関して、その立地する場所や集落との関係、概要について整理した。さらに例えば堀⁶⁾が「墓地は集落のすぐ脇の小高いところに置かれることが多い。そこからは、生前暮らした家、働いた海と船溜まりが眺められ、死後もほとんど変わらない暮らしができるかのようである。事故が死に直結しかねない漁村では、このようにして死と付き合う形が整えられてきたとされている。もちろん日当たりもよく、少しも暗い場所ではない。」と述べているように、これまで多くの漁村研究で墓地の立地位置が注目されていることから、本研究でも墓地の位置について着目し、集落間での比較をおこなった。また集落の空間構成に大きな影響を与える、道路構成および、組割りに関しても把握した。

(2) 両集落の空間構成

a) 集落の立地地形

できるだけ昔の状態を知るために、現在入手できる中で最も古い昭和38(1963)年の航空写真をもとに、現地形図に修正を加えた地形図を作成したのが図-2である。

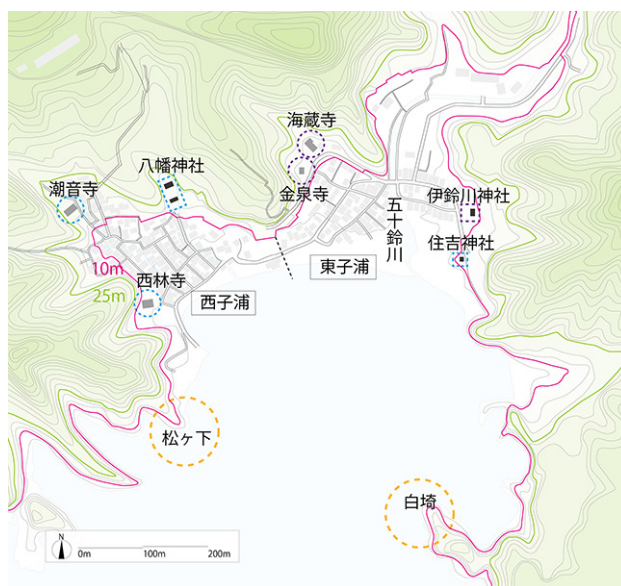


図-2 昭和38(1963)年地形図

これをみると、両集落とも松ヶ下、白埼という地形で囲まれた湾を共有している。浜は中心あたりに岩場があり、2つにわかれている。家屋の立地をみると、西子浦は標高 25m 付近までいくつかの家屋が存在しているが、両集落とも基本的には遷緩線（地形の変わり目を指す等高線）に相当する標高 10m 付近までのなだらかな地形に立地し、家屋が立地している居住域に関して同程度の大きさである。さらに両集落に共通して、集落の外縁には社寺が配置されており、これが集落の原型ラインを形成していたと考えられる。

このように集落の立地地形および、その居住域や社寺の配置といった構成は、両集落とも共通する傾向がみられる。

b) 道路構成と組割り

作成した地形図をもとに、集落内の通り 70 カ所の幅員計測をおこない、両集落の道路構成を把握した。その結果、西子浦ではグリッド状に道路が組まれており、実測した幅員をみると八幡神社の通りが 2.5m と集落の中で一番大きな通りとなっている。それ以外の通りでは 1.6m ～ 2.0m と同程度の大きさであり、幅員からは八幡神社の通り以外にはヒエラルキーがみられない。しかし、これに組割りを重ねてみると、浜に向かう 4 本の通りに対して、それと向かい合う家屋同士で組が構成されていることがわかった。さらにこれらの通りのなかで組がわかるものもあるが、その基準には東西方向の通りが用いられているわけではない。このことから西子浦においては、浜に向かう 4 つの通りが集落の骨格を形成していると考えられる。これに対し、東子浦では通りの幅員は 2.0m 前後で構成されており、西子浦のように神社の前の通りが太くなっているわけではなかった。また組割りを重ねても、集落の東側では通りを中心として家屋が両側に張りつく構成もみられるが、西側では必ずしもその構成をとらず、組割りの基準もみえにくい。こうしたことから、東子浦においては西子浦と異なり、組割りや道路構成による集落の骨格はみられなかった。



図-3 道路構成、組割り図

c) 神社の立地

両集落には合わせて 3 つの神社があり、いずれも集落の外縁に配置されている。このうち西子浦の八幡神社（文明 18（1486）年創建）は、集落の中で最も太く、浜と真直ぐ結ぶ通りに位置しており、その立地する標高をみて も神社、集落、浜という順で集落が構成されている。

東子浦には伊鈴川神社（承応元（1652）年建造）と住吉神社（創建年不詳）が置かれている。伊鈴川神社は、西子浦の八幡神社ように、神社、集落、浜という空間構成をとっておらず、むしろ浜に対して神社と集落が並列の位置関係にあるといえる。なお詳しい関係はわかっていないが、集落を流れる五十鈴川と同じ読み方である。



図-4 集落の配置構成

住吉神社は、海や航海に関わる神社であることが多いことから、なぜ農業を生業とする東子浦に位置しているのか疑問に思い、ヒアリングをおこなったところ、住吉神社は西子浦の神社であることがわかった。この住吉神社は、松ヶ下、白埼から形成される子浦の湾のほぼ中心に位置していることから、地形 CG を用いて海上からの眺めについて確認した（図-5）。これをみると、神社の背後の山が 2 つの岬に挟まれた、視認性の高い山であることがわかる。このことから、西子浦が海からの眺めに注目し、この場所を選んだ可能性があると考えられる。

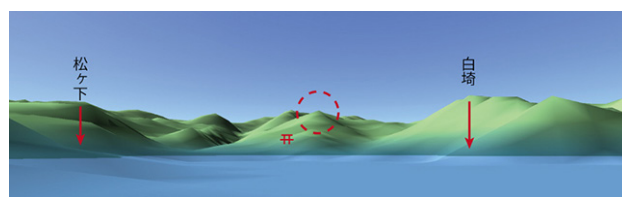


図-5 海上からの住吉神社の眺め

d) 寺院と墓地の立地

寺院は西子浦に潮音寺（明応 2（1494）年創建）と西林寺（天文 13（1545）年創建）、東子浦に金泉寺（正保元（1645）年創建）と海蔵寺（延宝 5（1678）年創建）がある。いずれも集落の外縁に位置し、それらの墓地が寺院の敷地内に設けられていることが共通している。ただ、敷地内における墓地の位置は異なっており、西子浦では敷地の海側、東子浦では山側にそれぞれ置かれている。

そこで墓地からの眺めを比較すると両集落とも集落を

見渡せることは共通しているが、西子浦では海への眺望がより意識された位置が選ばれているのが特徴である(図-6, 図-7)。



図-6 西林寺墓地からの眺め



図-7 金泉寺墓地からの眺め

3. 住民の空間利用と意味づけ

(1) 調査の視点

住民の空間利用と意味づけを把握するために、集落内と集落外にわけて調査をおこなった。集落内としては、集落内での名づけ、冠婚葬祭、集落における重要な場所に着目した。このうち冠婚葬祭を取り上げる理由としては、例えば斗鬼²⁾は「道路の物質文化論 新潟県津南町見玉のホンドウリを事例として」において、冠婚葬祭で通るルートはヒエラルキーの高い順番に構成されていることを示しており、本集落においてもこれらの行事が、集落内の意味づけに大きく関係している可能性があるからである。具体的には祭りにおける神輿のルート、葬儀におけるルート、婚姻におけるルートに着目した。また集落内で大事にされている場所については子どもの頃の遊び場を調査することで代用することとした。また集落外については海岸域の地名認識に着目した。

調査の方法としてはヒアリングとアンケートとし、アンケートは全戸配布した結果、60～80代を中心に、西子浦18名、東子浦22名の回答を得られた。

(2) 集落内の空間利用

a) 集落内の名づけ

両集落の場所に対する名づけを把握した。その結果、西子浦では通りに対して名前がつけられていることがわかった。ただ全ての通りに対して名前がつけられているわけではなく、浜に向かう4本の通りだけに限定されている。具体的には、東側から順に宮町(お宮の通り)、井戸町(共同井戸のある通り)、仲之町(集落の中心に位置

する通り)、アラ町(今回調査では不明)と呼ばれている。一方東子浦では、組に対して名前がつけられており、伊鈴川神社周辺を宮町、五十鈴橋の東側を橋町、集落の上部を上宿、下部を下宿、寺周辺を寺町、浜付近を浜町と呼んでいることがわかった(図-8)。

両集落とも名づけの由来となるものは、その対象の近くの神社や橋、寺などのランドマーク的なもの、もしくは集落内の位置関係から名づけている傾向にあるといえる。ただ、その対象に関しては、西子浦は海へと向かう通りに対し強く意味づけをおこなっているのに対し、東子浦は面的な範囲に対して意味づけをおこなっているという違いがみられた。



図-8 集落内の名づけ

b) 冠婚葬祭

まず祭りにおける神輿のルートを把握した結果、西子浦では往路、復路ともに八幡神社と浜を結ぶ通りだけを通るのに対し、東子浦ではすべての組を通るように、浜を経由し集落を1周するルートを選択しているという違いがみられた(図-9)。これは神社と浜を結ぶような形をとる西子浦とは異なり、東子浦では集落のまとまりを強固にするような意味があると考えられる。また踊りについて、浜で槍振りという舞を踊る西子浦とは違い、東子浦では伊鈴川神社で人形三番叟という人形を用いた舞を演じることがわかった。



図-9 祭りにおける神輿のルート

次に葬儀におけるルートを把握した結果、両集落とも寺に向かう道に取り決めはないとの回答だった。ただ両集落とも同様の方法で葬儀をおこなっていることがわかった。具体的には、まず所属する組の人が集まり、食

事等の準備をおこない、親類が集まると血縁関係の強い順に決められた品を持ち、行列をつくり寺へと向かう。その後、舟で松ヶ下の先にある焼き場へ向かい火葬をおこなう。すなわち両集落は互いの集落内を通らずに焼き場へと向かうことになっている。なおこの焼き場の位置は集落から最も近く、かつ両集落から視認できない入江に設けられているという特徴がある（図-10、図-11）。



図-10 焼き場位置



図-11 焼き場からの眺め

c) 子どもの頃の遊び場

子どもの頃の遊び場については、よく遊んだ場所を1人3カ所までアンケートした結果、28名から64の回答があった。両集落とも最も回答が多かったのが浜であり、基本的には自分たちの集落の浜を選択していたことがわかった（図-12）。



図-12 子どもの頃の遊び場

このことから、浜を自分たちの空間の一部として認識していると考えられる。また西子浦の特徴として、八幡神社もよく遊び場として選ばれており、神社と浜の軸を反映した結果となった。

d) 集落周辺の地名認識

図-13の地名を空欄にしたアンケート用紙を用い、集落の沿岸域における地名認識を調査した。その結果をまとめたのが表-1である。



図-13 集落沿岸域の地名

表-1 地名アンケート結果

	地名A	地名B	地名C	地名D	地名E	地名F
	龍崎	日和山	地長這	長這	地蔵ヶ鼻	黒根
西子浦	91% 10/11	100% 12/12	50% 5/10	40% 4/10	30% 3/10	60% 6/10
東子浦	20% 1/5	92% 11/12	0% 0/0	75% 6/8	43% 3/7	29% 2/7
	地名G	地名H	地名I	地名J	地名K	地名L
	天狗山	濱田山	白崎	鯛ヶ崎	京ノ字島	弁財鼻
西子浦	100% 13/13	88% 7/8	100% 10/10	67% 6/9	22% 2/9	0% 0/0
東子浦	100% 16/16	100% 17/17	100% 16/16	67% 4/6	0% 0/0	33% 2/6

これをみると両集落ともに高く認識されているのは、松ヶ下、白崎である。これは集落からよく視認でき、それが子浦の湾の範囲を示すものとして捉えられることが理由と考えられる。また、両集落の間に位置する天狗山は、東子浦でははっきりとした山の形が捉えられるが、西子浦では山と認識しにくいことが差に表れている。一方で日和山は、両集落から山と認識できるが、西子浦は8割、東子浦は5割と差がみられる。これは日和山が海の状態や天候をみる場所として漁師に利用されてきたことから、生業の違いが差に表れたと考えられる。

他にも生業の差として地長這、地蔵ヶ鼻、龍崎が考えられる。地長這は、長這という島に対して陸地側を指す地名であり、西子浦ではそれらを区別して認識しているのに対し、東子浦では一括りに捉えている。地蔵ヶ鼻については、西子浦では黒根という回答が多くみられた。つまり同じ場所でも東子浦ではその陸地部分に、西子浦では海中部分にと、注目する場所が異なるという興味深

い結果が得られた（図-14）。さらに龍崎は、妻良湾の口にあたる地形で、西子浦の漁業範囲が落居という北にある集落あたりまでであったことから、漁の通り道としてよく目することが差として表れたと考えられる。

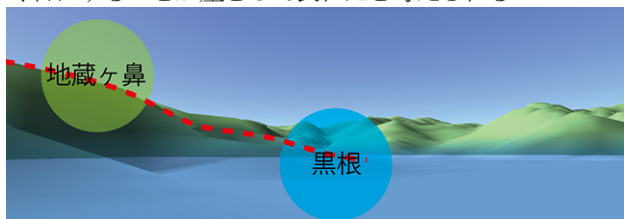


図-14 黒根，地藏ヶ鼻の認識

伊鈴川神社と住吉神社の背後の山の認識は両集落とも低かったが興味深いのは、向山と住吉山という回答である。向山は集落と向かい合う山として認識されていると考えられる。住吉山という呼び名は、麓にある住吉神社に由来すると考えられる。ただ、伊鈴川神社も麓に位置しているが、こちらが由来していないことを考えると、住吉神社と背後の山に強い関係性があると考えられる。

4. 生業に着目した環境認識の特徴

両集落における空間構成と住民の空間利用と意味づけの分析結果をまとめたものが表-2である。

表-2 分析結果

	西子浦	東子浦
立地地形	標高10mまでのなだらかな地形	
社寺配置	集落の外縁	
道路構成の特徴	八幡神社の通りが一番太い	幅員による差はみられない
組割り	通りと向かい合う家で構成	通りと向かい合う家屋だけ構成されていない
集落内の名づけ	浜に向かう4本の通り	面的な範囲の組
神輿のルート	神社と浜を真直ぐ結ぶ通りのみ	すべての組を通るルート
神社位置と集落の関係	神社、集落、浜の順で構成される	浜に対して神社と集落が並列関係にある
集落の骨格	海に向かう軸線	すべての組を通る8の字
子どもの頃の遊び場	浜と神社	浜
踊りの場所	浜	伊鈴川神社
墓地の位置	寺の海側	寺の山側
墓地からの眺め	集落と海を見渡せる	集落を見渡せる
祭りの開催日	同日	
祭儀の手順	同じ手順でおこなう	
焼き場の位置	集落から視認できない入江	
葬儀におけるルート	取り決めなし	
地名認識(集落周辺)	視認できる範囲で高い認識	
地名認識(沿岸域)	生業のおよぶ範囲まで認識	認識として低い

これを見ると2つの集落に共通することとして標高からみた立地範囲やその外縁に社寺を配置していること、さらに松ヶ下や白崎といった湾の範囲を示す地名認識が高いことが挙げられる。こうした共通点を結んで得られる範囲を居住空間域と呼ぶと、居住空間域は生業に依存せず、周辺の視認しやすい地形と、それを補完するように配置された社寺を利用し、自分たちの集落を定位づけるような範囲を設定するものではないかと考えられる。一方、居住空間域の外側の地名認識では集落間で差がみられ、海岸域において西子浦の認識が高い結果となった。今回の研究では東子浦についてはわからなかったが、居住空間域の外側に、生業に応じた空間域の設定がなされ

るのではないかと考えられる。

また両集落における相違点として、集落内の空間構成と意味づけが挙げられる。西子浦では、浜と神社を結ぶ軸が組割りや集落の骨格に大きく影響し、生業の場である海と信仰対象の神社が強く結びついた構成である。祭りのルートや名づけをみても、海との軸を強調するように構成されている。一方東子浦では、西子浦のように生業の場に対して軸をとるのではなく、面的な組に対しての名づけやすすべての組を通り集落を一周する神輿のルートなどから、むしろ集落としてのまとまりを生むような構成と意味づけがなされているように思われる。今回研究対象とした集落は2つに過ぎないため一般化することはできないが、西子浦、東子浦集落についていえば、居住空間域と名づけた周辺環境のなかで、自分たちの集落を定位づけるための環境認識においては、その地形が大きな意味を持っており、そのなかで展開される空間構成や意味づけにはその生業が大きな影響を与えると考えられる。このことから、居住空間域については、地形状況が大きく影響しているものの、その空間構成には生業が大きく影響すると考えられる（図-15）。



図-15 西子浦，東子浦集落の居住空間域

5. 結論

本研究では以下の項目について明らかにした。

①同一の環境下で生業の異なる集落である西子浦，東子浦集落を対象に，その空間構成および住民の空間利用と意味づけ，周辺環境に対する認識を把握し，両集落の共通点と相違点について整理した。

②これを踏まえた考察をおこない，西子浦，東子浦集落においては，環境認識の特徴として，居住空間域およ

びその外側に生業に応じた領域設定が存在することを示した。前者は地形状況に依存し、自分たちの集落を定位づけるような範囲を設定しているが、その空間構成には生業が大きく影響していることを示した。

参考文献

- 1) 今里悟之：農山漁村の空間分類－景観の秩序を読む，京都大学学術出版会，2006. 2
- 2) 道路の物質文化論－新潟県津南町見玉のホンドウリを事例として－：鬼斗正一，明治大学大学院紀要，1978
- 3) 神代雄一郎：日本のコミュニティ，鹿島出版，1977
- 4) 静岡県史 近世二，p243，静岡県，1997
- 5) 伊豆松崎の民俗，東京教育大学民俗学研究所，1961
- 6) 篠原修：景観用語辞典，彰国社，1998